

博多184

—第231次調査報告—

2022
福岡市教育委員会

博多 184

—第231次調査報告—



遺跡略号 HKT-231
調査番号 1915

2022
福岡市教育委員会

序

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝えていくことは現代に生きる我々の重要な務めであります。

福岡市教育委員会では近年の開発事業に伴い、やむをえず失われていく埋蔵文化財について事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

本書はホテル・店舗建設に伴う博多遺跡群第231次調査について報告するものです。この調査では、12世紀頃から江戸時代にかけての遺構を検出し、貴重な成果をあげることができました。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となるとともに、学術研究の資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、合同会社SI開発様をはじめとする関係者の方々には発掘調査から本書の作成に至るまでご理解とご協力を賜りました。心から感謝申し上げます。

令和4年3月24日

福岡市教育委員会
教育長 星子 明夫

例　言

1. 本書は、福岡市教育委員会がホテル・店舗建設に伴い、福岡市博多区須崎町16-1、16-2、16-3、17、31-1、31-2、32地内において令和元年6月10日から令和元年11月1日にかけて発掘調査を実施した博多遺跡群第231次調査の報告書である。
2. 発掘調査および整理報告書作成は、民間受託事業として実施した。
3. 遺構の実測と写真撮影は上角智希、名取さつきが行った。
4. 遺物の実測と写真撮影は上角、中原三栄子が行った。
5. 製図は上角、長野千重、貝原知子が行った。
6. 本書で用いる方位は磁北である。
7. 本書に掲載した座標は世界測地系を用いた。
8. 座標・標高は、都市再生街区基本調査成果の多角点10A67、10C26から引照した。
9. 本書に使用した遺構略号は以下の通りである。
SD 溝、SE 井戸、SK 土坑、SX その他、SP ピット
10. 本書に関わる記録・遺物等は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される予定である。
11. 本書の執筆・編集は上角が行った。

遺跡名	博多遺跡群	調査次数	2 3 1 次	調査略号	HKT-231
調査番号	1 9 1 5	分布地図図幅名	49 天神	遺跡登録番号	401320121
申請地面積	448.31m ²	調査対象面積	448.31m ²	調査面積	315m ²
調査期間	令和元年6月10日～令和元年11月1日			事前調査番号	30-2-1020
調査地	福岡市博多区須崎町16-1、16-2、16-3、17、31-1、31-2、32				

本文目次

第1章 はじめに.....	1
1. 調査に至る経緯.....	1
2. 調査体制.....	1
第2章 遺跡の立地と環境.....	2
第3章 調査の記録.....	4
1. 調査の概要.....	4
2. 近世の遺構と遺物.....	11
3. 中世の遺構と遺物.....	21
第4章 まとめ.....	27

挿図目次

第1図 博多遺跡群位置図 (1/25,000)	2
第2図 第231次調査地点位置図① (1/2,500)	3
第3図 第231次調査地点位置図② (1/1,000)	4
第4図 調査区割図 (1/300)	5
第5図 1区第1~4面の遺構配置図 (1/80)	6
第6図 中世の遺構配置図① (1/80)	8
第7図 中世の遺構配置図② (1/80)	10
第8図 SK07 (1/40) および出土遺物 (1/3・1/4)	11
第9図 SK10 (1/40) および出土遺物 (1/3)	12
第10図 SK17 (1/40)	14
第11図 SK17出土遺物① (1/3)	14
第12図 SK17出土遺物② (1/4)	15
第13図 SK18 (1/40)	14
第14図 SK18出土遺物 (1/3・1/4)	17
第15図 SK19 (1/40) および出土遺物 (1/3・1/4)	17
第16図 SX12・13 (1/40)	19
第17図 SE23 (1/60) および出土遺物 (1/3・1/4)	20
第18図 SK29 (1/60) および出土遺物 (1/3・1/4)	22
第19図 SK33 (1/60) および出土遺物 (1/3)	22
第20図 SK59 (1/40) および出土遺物 (1/3)	23
第21図 SE39 (1/80)	23
第22図 SD35・62出土遺物 (1/3)	24
第23図 SX45 (1/40) および出土遺物 (1/3)	24
第24図 その他の出土遺物 (1/3)	26

写真目次

写真1	1区第1面全景（北西から）	7
写真2	1区第2面全景（北西から）	7
写真3	1区第3面全景（北西から）	7
写真4	1区第4面全景（北西から）	7
写真5	1区第5面全景（北東から）	9
写真6	2区第1面全景（南東から）	9
写真7	3区第1面全景（南東から）	9
写真8	4区全景（南東から）	9
写真9	2区第2面全景（南東から）	10
写真10	3区第2面全景（南東から）	10
写真11	SK07出土遺物	12
写真12	SK10（北西から）	13
写真13	SK17検出状況（南東から）	13
写真14	SK17（南西から）	13
写真15	SK17（南東から）	13
写真16	SK17・18・19（北東から）	16
写真17	SK18（南西から）	16
写真18	SK18西壁（東から）	16
写真19	SK18東壁（北西から）	16
写真20	SK19検出状況（南東から）	18
写真21	SK19半裁状況（南東から）	18
写真22	SK19から出土したアワビなどの貝殻	18
写真23	SX12（北から）	19
写真24	SX13（東から）	19
写真25	SK07壁面の焼土層（南東から）	21
写真26	焼土層SX28検出状況（東から）	21
写真27	焼土層SX28（南西から）	21
写真28	SE39（南西から）	23
写真29	SX45（南東から）	25
写真30	SX45（北東から）	25
写真31	SX45土層②（北西から）	25
写真32	SX45除去後（北東から）	25

第1章 はじめに

1 調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、福岡市博多区須崎町16-1、16-2、16-3、17、31-1、31-2、32におけるホテル・店舗建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を平成31（2019）年1月28日付で受理した（事前審査番号30・2・1020）。

申請を受け、埋蔵文化財課事前調査係が平成31年2月27日に試掘調査を行った。試掘の結果、GL-150cm以下に中世以前の遺跡が残っていることが確認された。地盤補強が入るため発掘調査が必要であると判断し、造構の保全等に関して申請者と協議を行ったが、設計変更が困難であることから記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

令和元（2019）年5月13日付で合同会社SI開発を委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、同年6月10日から発掘調査を、令和2～3年度に資料整理および報告書作成を行うこととなった。

2 調査体制

調査委託：合同会社SI開発

調査主体：福岡市教育委員会

（発掘調査：令和元年度・資料整理：令和2～3年度）

調査総括：文化財活用部埋蔵文化財課長

同課調査第1係長

菅波 正人（令和元～3年度）

吉武 学（令和元・2年度）

本田 浩二郎（令和3年度）

松原 加奈枝（令和元・2年度）

井手 瑞江（令和3年度）

内藤 愛（令和3年度）

本田 浩二郎（令和元・2年度）

田上 勇一郎（令和3年度）

田上 勇一郎（令和元・2年度）

森本 幹彦（令和3年度）

朝岡 俊也（令和元年度）

山本 晃平（令和2・3年度）

上角 智希（令和元年度）

上角 智希（令和2・3年度）

庶務：文化財保護課管理調整係

事前審査：埋蔵文化財課事前審査係長

同課事前審査係主任文化財主事

同課事前審査係文化財主事

調査担当：埋蔵文化財課調査第1係主任文化財主事

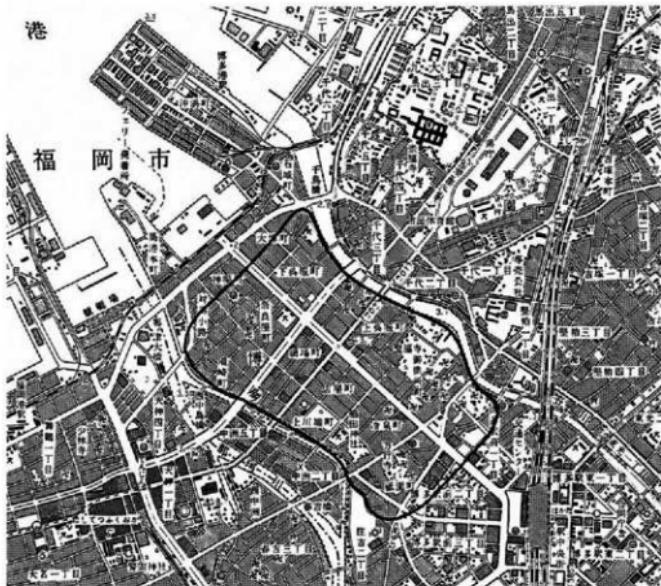
埋蔵文化財センター 保存分析係長

第2章 遺跡の立地と環境

博多遺跡群は福岡平野のはば中央、那珂川（博多川）と御笠川（石堂川）に挟まれた古砂丘上に立地する。現在の地理で言えば、JR博多駅から北西へ、湾岸の福岡サンパレスまでまっすぐに伸びる大博通りを中心軸とした東西0.8km、南北1.5kmの範囲である。

中世段階の博多は南北に3列の砂丘が並んでおり、内陸側の2砂丘を「博多浜」、海側の砂丘を「息浜」と称している。この2つの浜が接する部分は古くは川が流れ、10・11世紀頃は湿地であったが、やがて埋め立てにより両砂丘をつなぐ陸橋が作られ、13世紀にはこの陸橋を越えて人々の生活領域が息浜に及んだが、その後の埋め立ては陸橋部の周辺に留まり、17世紀初めまで北東と南西から食い込むような形で入り江が残っていた。

今回の第231次調査地点は、息浜の西端部に位置している。博多祇園山笠のクライマックスである最終日7月15日の追い山のゴール地点「廻り止め」として有名な石村萬盛堂本店があった場所である。近隣の調査例としては、本調査地点から昭和通り沿いに北東側へ50mの地点で第123次調査が行われており、標高20~21mの黄褐色砂層上面で12世紀後半~13世紀前半の井戸や土坑、土坑墓が検出されている。



第1図 博多遺跡群位置図 (1/25,000)



第2図 第231次調査地点位置図① (1/2,500)

第3章 調査の記録

1 調査の概要

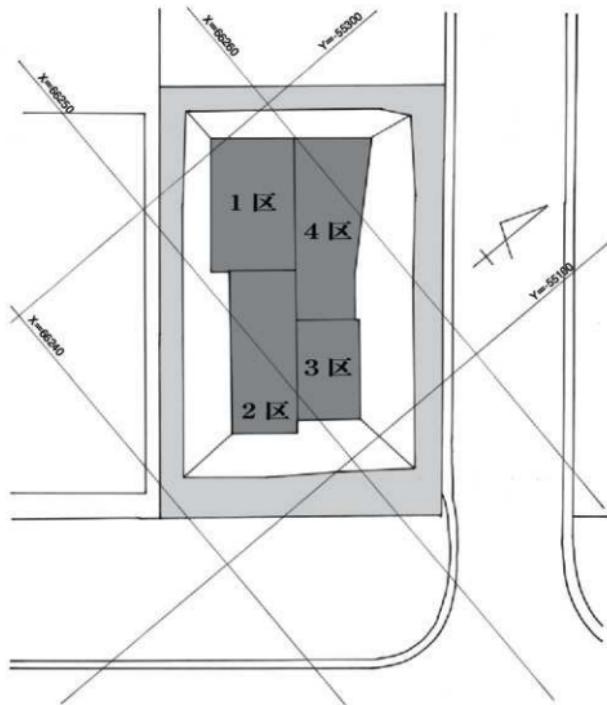
調査地の現況は宅地（店舗）である。申請地全体が発掘調査の対象となるが、調査着手時点で建築工事の業者が決まっていないことから矢板等での土留工事を行わず、法面の勾配をとつての明かり掘削となった。また敷地内で深さ2.5m以上の排土の置場を確保する必要があるため、調査地内を1~4区に分割して、掘削、調査、埋め戻しを順次繰り返した（第4図）。そのため調査対象面積448.31m²のうち実際に調査できた面積は調査区上端で315m²に留まる。



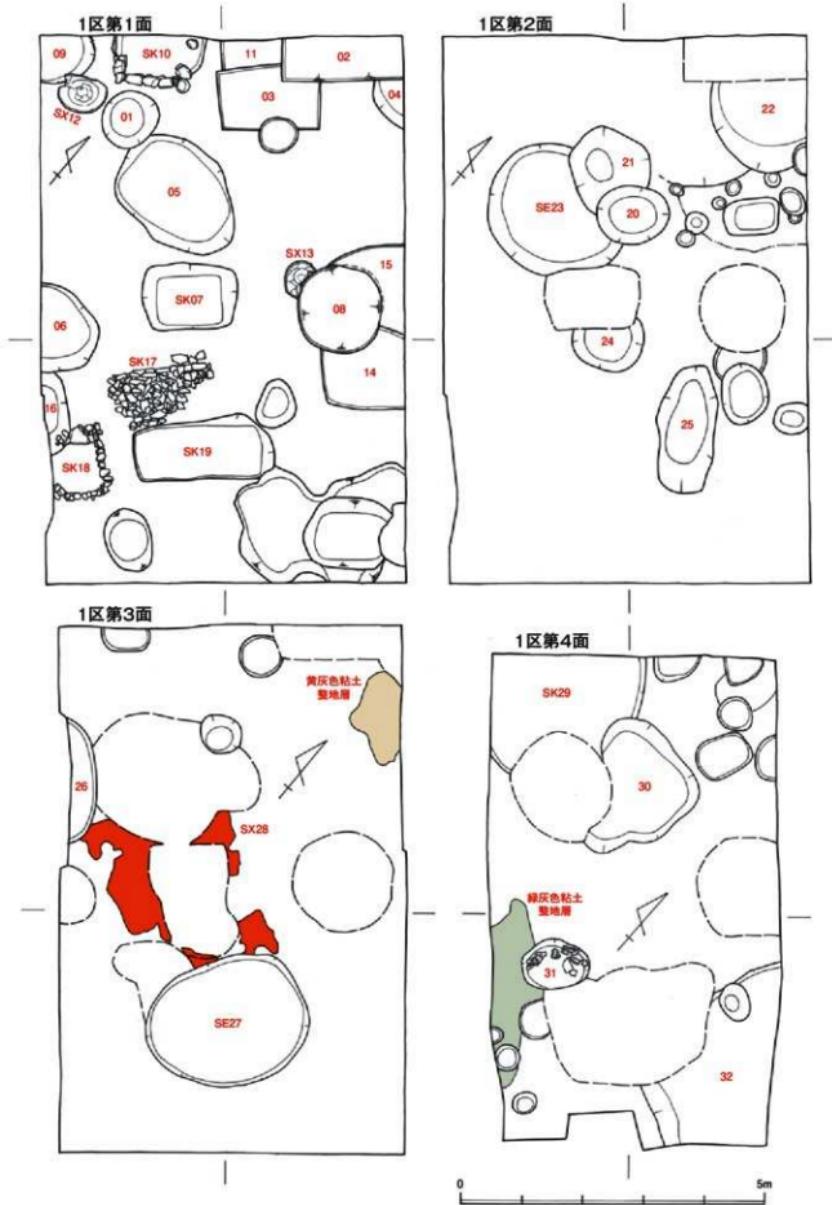
第3図 第231次調査地点位置図② (1/1,000)

まず敷地西側の1区から調査を開始した。試掘結果をもとにGL-150cmを目安に重機で表土を動取った。この深さまでの間、瓦・煉瓦・コンクリートを大量に含む攪乱が広範囲に分布する。本調査区の現地標高は約4.7mで、1区第1面が標高約3.0mである。近世の遺構面であると分かったが、周囲での調査歴がないため、どの深さで中世遺構面になるのかの手がかりがない。プランが明瞭な遺構を掘っては次の遺構面まで面的に掘り下げる作業を繰り返し、第2面（標高約2.8m：近世）、第3面（標高約2.6m：中世後半）、第4面（標高約2.2m：中世後半）と人力で掘り進めた。重機を投入して掘削し第5面（標高約1.2m：12世紀頃）を調査。これより下は無遺物層の水成堆積である。結局、12世紀頃の遺構面は現地表の3.5m下にあることがわかった。遺構分布はさほど密ではない。

残りの2区～4区については、工期の都合から全5面の調査は無理なので中世の遺構面に限って調査を行なった。GL-320cmまで重機で掘削し、標高約1.5mの高さから調査を開始し、1面ないし2面を調査した。



第4図 調査区割図 (1/300)



第5図 1区第1~4面の遺構配置図 (1/80)



写真1 1区第1面全景（北西か6）



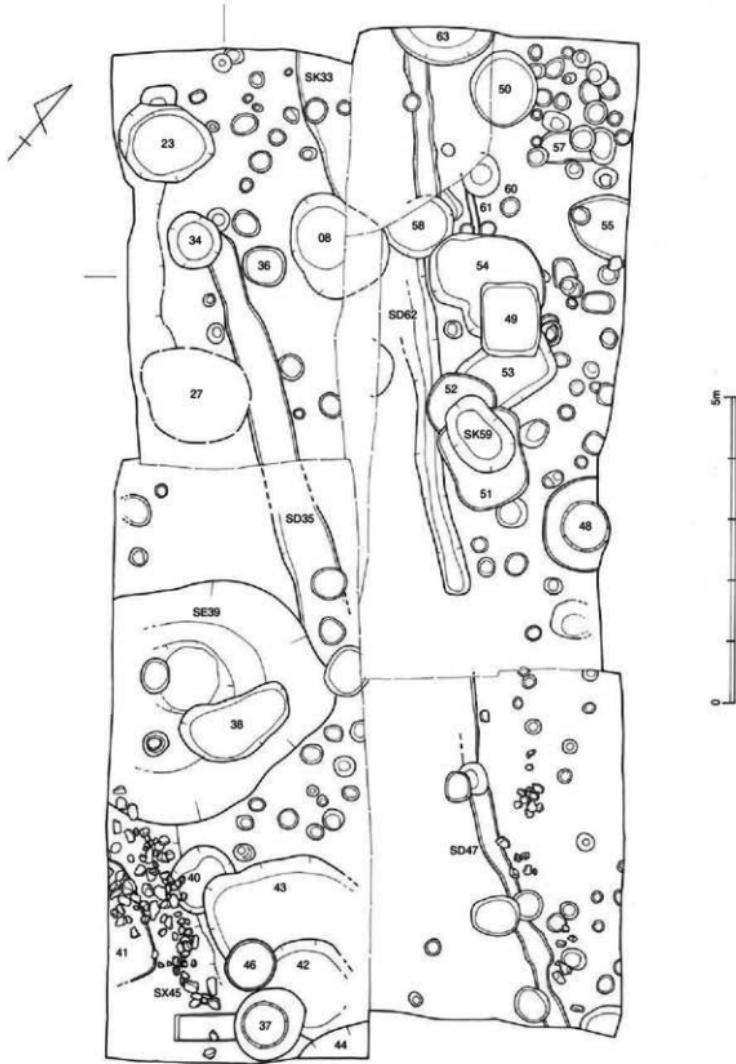
写真2 1区第2面全景（北西か6）



写真3 1区第3面全景（北西か6）



写真4 1区第4面全景（北西か6）



第6図 中世の遺構配置図① (1/80)



写真5 1区第5面全景（北東から）

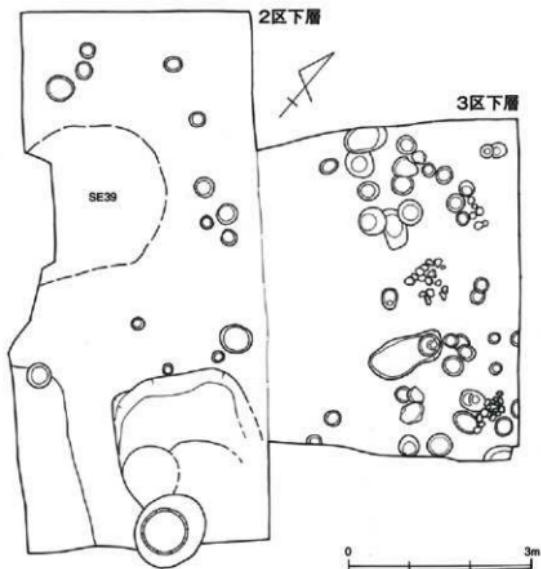


写真6 2区第1面全景（南東から）



写真7 3区第1面全景（南東から）

写真8 4区全景（南東から）



第7図 中世の遺構配置図② (1/80)



写真9 2区第2面全景（南東から）



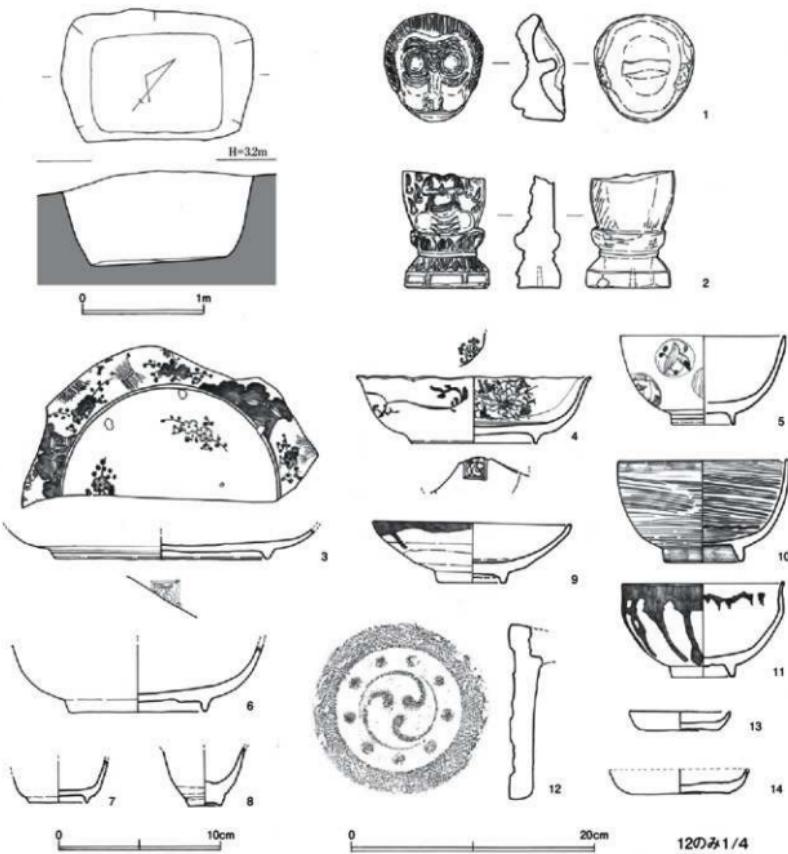
写真10 3区第2面全景（南東から）

2 近世の遺構と遺物

I区についてのみ近世段階の遺構を調査した（第5図）。第1面・第2面がそれである。井戸2基のほか、土坑、ピットを検出した。

SK07（第8図）

長径1.6m、短径1.1mの隅丸方形を呈し、深さは70cm残る。埋土は黒褐色土で炭化物を含む。土坑内に大量の瓦を廃棄している。1は土製の猿の面である。高さ6.6cm、幅6.1cmを測る。面側は型押し成型しており、表面に一部赤色顔料が付着している。裏面にはつまみ状の突起がある。2は土製の仏像である。残長7.2cm、幅5.2cm、厚み2.8cmを測る。合わせ型で成形した後、背面を板でナデ調整する。底部に穿孔有り。3・4は肥前系の染付皿である。いずれも高台裏に「渦福」の銘あり。5は肥前系染付碗



第8図 SK07 (1/40) および出土遺物 (1/3 · 1/4)

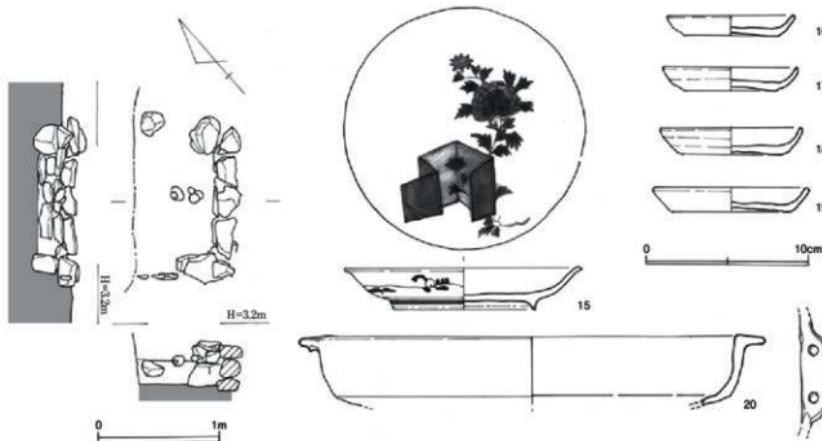


写真11 SK07出土遺物

である。6は白磁皿である。7・8は白磁の小坏である。9は肥前系陶器皿。黄色味の釉の上から緑釉をかける。見込みを蛇の目釉剥ぎする。10・11は陶器碗。10は刷毛目装飾する。11は明茶色の釉を口縁部内外面から流す。12は巴紋の軒丸瓦。13・14は土師器小皿。

SK10（第9図・写真12）

石組みの方形土坑である。石組みの内側の径が0.8m、深さ約35cmが残り、石が2~3段積まれている。埋土は黒褐色粘質土および暗褐色砂質土である。15は肥前系染付皿である。完形品で口径14.5cm、器高2.6cm、底径8.6cmを測る。16~19は土師器小皿である。20は土師質の焰燭である。復元口径26.4cm、器高4.3cmを測る。2つの穿孔がある耳が両側につくのである。外面に煤が付着する。



第9図 SK10 (1/40) および出土遺物 (1/3)



写真12 SK10（北西から）



写真14 SK17（南西から）



写真13 SK17検出状況（南東から）



写真15 SK17（南東から）

SK17 (第10図・写真13~15)

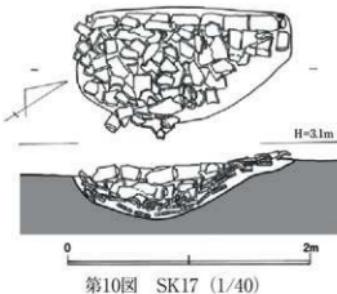
丸瓦・平瓦を葺いた土坑である。I区第1面のあちこちに瓦が散布しているが、特にここは丸瓦をL字状に配置したかのような部分があったので慎重に掘り進めた。瓦の分布範囲は図のような長径18m、短径0.8mの略長方形になり、北東側はおそらく後世に削り取られたものと推測する。瓦が大量に放り込まれたような状況であったが、上のほうから瓦を取り外していくと、西側の辺は丸瓦が直線的に並んでいる。北辺は直角方向に丸瓦が1点配置されておりこちらも直線的に並べられているのではないかと推測される。單なる廃棄土坑であれば土坑の周間に丸瓦を整然と並べる必要はない。何らかの意味があるのではと思うが具体的にわからない。埋土に炭や焼土は含まれない。

第11図21~22は肥前系の染付碗である。21は蛇の目高台。23は肥前系の染付蓋である。24は肥前系の染付壺である。釉はやや青灰色を帯びる。25は土師質の炮烙である。復元口径28.8cm、器高7.8cmを測る。外底に煤が付着する。

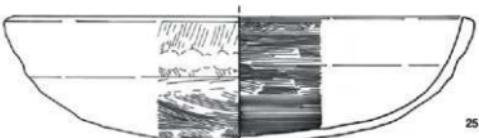
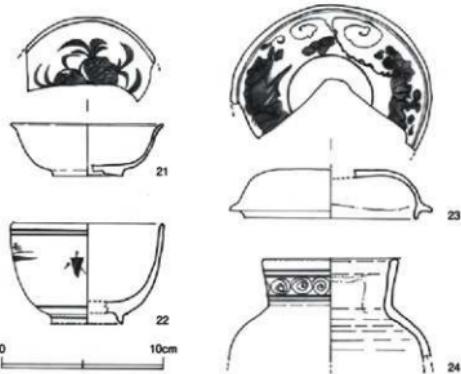
第12図26~28は軒平瓦である。26は中央に三葉文、脇に唐草文を、27は中央に花菱文、脇に唐草文を配する。29は中央に宝珠、両脇に波条の3本線に単純化された唐草文を配する。29・30は平瓦、31は丸瓦である。平瓦と丸瓦には共通して32もしくは33の刻印がある。32は丸の中に放射状に直線を配し花のように見える刻印である。33は「井」字形の刻印である。

SK18 (第13図・写真17~19)

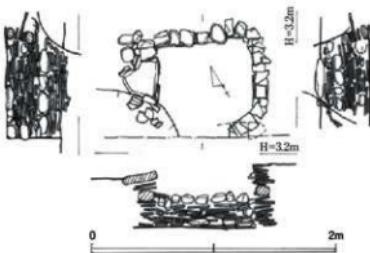
石と瓦を組み合わせて壁面をつくった石・瓦積土坑である。南側は擾乱により破壊されている。壁面の内側で直径0.8mを測る。壁面は高いところで50cm残存する。



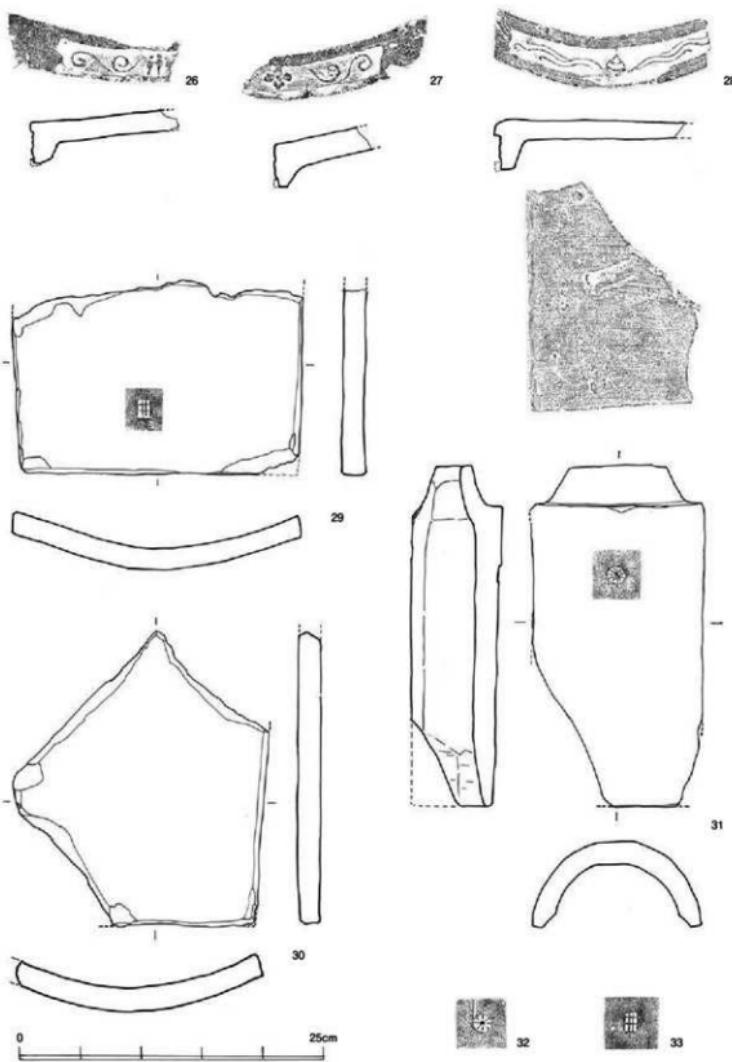
第10図 SK17 (1/40)



第12図 SK17出土遺物① (1/3)



第13図 SK18 (1/40)



第12図 SK17出土遺物② (1/4)



写真17 SK18（南西から）



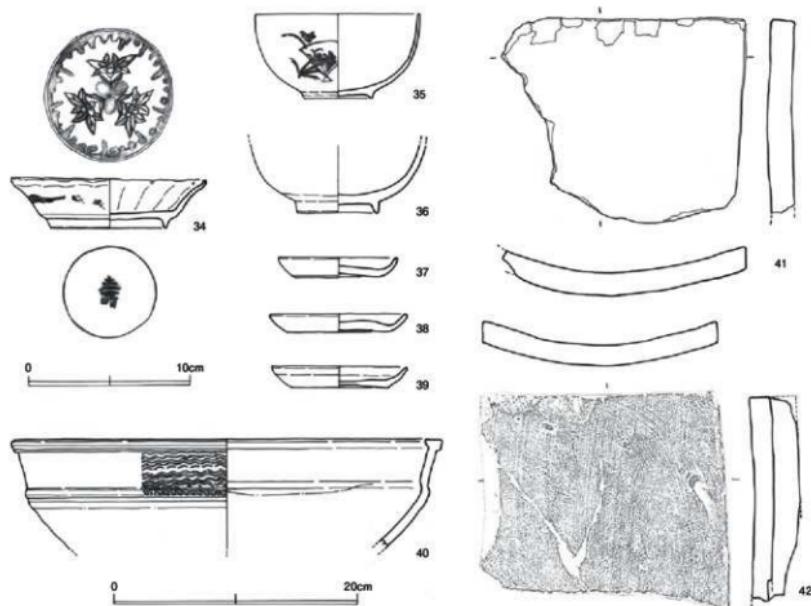
写真19 SK18東壁（北西から）



写真16 SK17・18・19（北東から）



写真18 SK18西壁（東から）



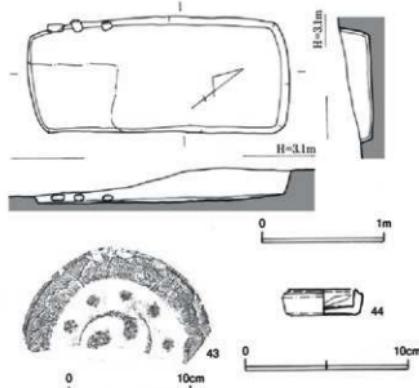
第14図 SK18出土遺物 (1/3・1/4)

第14図34は肥前系の染付皿である。口縁部を花弁状に成形する。内面見込みの花文は印判。35は肥前系の染付碗。36は京焼風の陶器碗で淡黄色を呈する。37～39は土師器小皿。40は肥前系の陶器の鉢で復元口径35.4cmを測る。釉は暗緑茶色を呈する。41・42は平瓦である。

SK19 (第15図・写真20・21)

長辺2.1m、短辺1.0m、深さ20cmの長方形土坑である。土坑内部に漆喰らしきものが充填されており、遺構検出時、ここだけ真っ白だった。底と壁面には黄灰色粘土を薄く貼っている。漆喰に混じってアワビ等の貝殻も出土した (写真22)。

43は巴紋の軒丸瓦である。44は白磁の合子である。完形品で口径4.9cm、器高1.5cmを測る。



第15図 SK19 (1/40) および出土遺物 (1/3・1/4)



写真20 SK19検出状況（南東から）



写真21 SK19半裁状況（南東から）



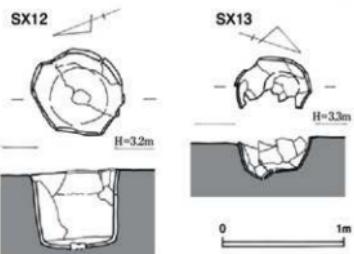
写真22 SK19から出土したアワビなどの貝殻

SX12（第16図・写真23）

土師質の大甕を埋めている。甕の底径は65cm、高さ60cm程度が残っていた。

SX13（第16図・写真24）

土師質の大甕を埋めている。井戸SE08に切られる。高さ30cmほどが残存。



第16図 SX12・13 (1/40)



写真23 SX12（北から）

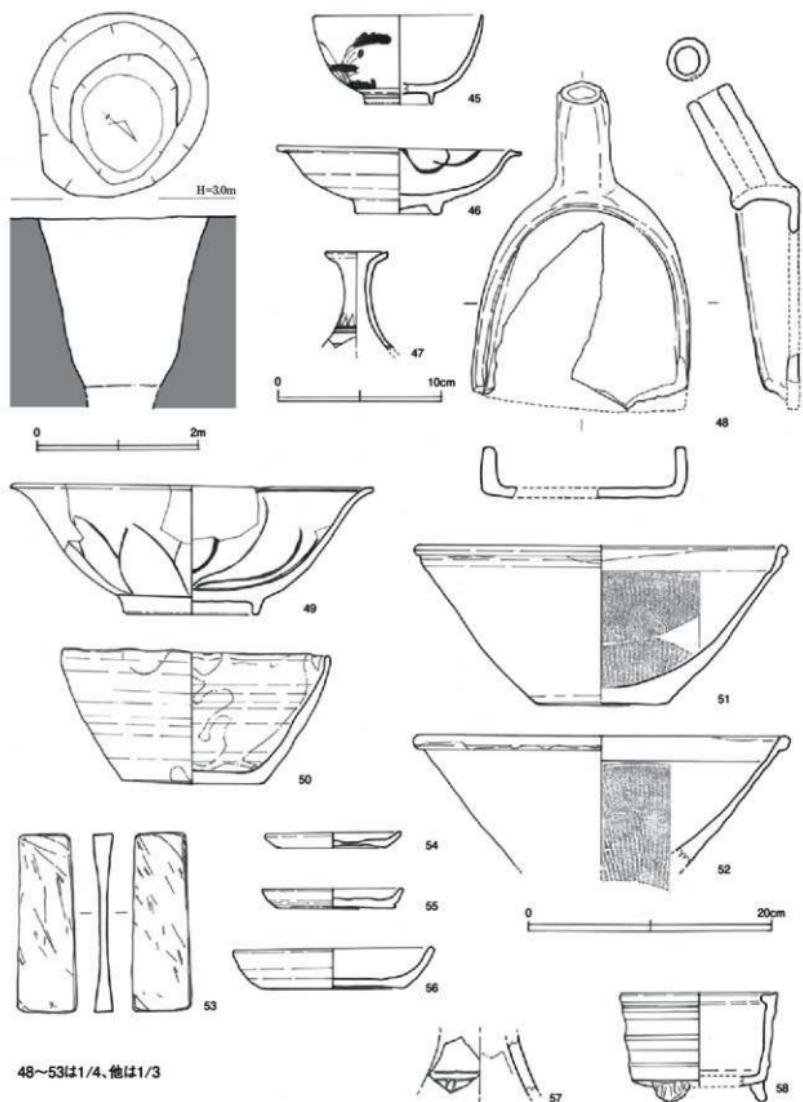


写真24 SX13（東から）

SE23（第17図）

第2面で直径2.2～2.3mの円形プランを確認した。埋土は黒褐色土で、少しずつ径が狭くなりながら最終面である第5面まで掘り下げ、井筒プランを確認できないまま標高0.7mで湧水した。

45は肥前系の染付碗である。46は陶器皿。黄色味を帯びた釉をかけ鉄絵を描く。47は肥前系の染付瓶。48は土製の十能である。スコップ部分の幅が16.8cmで円筒状の取手がつく。49は肥前系の青磁の大鉢で復元口径29.8cm、器高10.6cm、底径11.1cmを測る。淡緑色を呈し外側に蓮弁文を描く。高台の内側が蛇の目状に露胎となる。50は陶器の鉢である。ほぼ完存し口径22.0cm、器高10.7cm、底径11.5cmを測る。暗茶色釉を全面にかけ外底の釉をふき取る。内面に白色釉を装飾的に流している。51・52は陶器の擂鉢である。胎土は赤茶色を呈し、褐色不透明の釉を口縁部にかける。51は復元口径30.8cm、器高13.1cm、底径11.0cmを測る。53は砥石である。端部の厚みは15mmだが、両面を研磨に使用し中央部の厚みは6mmまで削っている。54・55は土師器小皿、56は土師器壺である。57は象嵌青磁の瓶である。緑灰色の釉をかけ白色土で象嵌を施す。58は龍泉窯系青磁の香炉である。淡青緑色釉で粗い貫入が入る。



48~53は1/4、他は1/3

第17図 SE23 (1/60) および出土遺物 (1/3・1/4)

3. 中世の遺構と遺物

1区第3面、第4面が中世後半（16世紀くらいか）、1区第5面と2区～4区が中世前半（12世紀中頃～13世紀）の遺構面にあたる。（第5・6・7図）

焼土SX28（第5図・写真25～27）

1区第1面の土坑SK07の壁面に赤く焼けた焼土層が確認できた（写真25）。第2面まで掘り下げるところ周囲でも焼土層が確認できた。この焼土層が戦国時代の戦乱に伴うものであるかもしれないので、焼土層を第3面に設定し、焼土の面的な広がりを確認した。その結果、焼土の分布は3m×2.5mくらいの範囲に限られた。焼土層の厚みは10cm程度である。焼土層から出土した遺物はごく少量の土師器片、青磁片だけである。染付はなくこの遺構面で検出された遺構の多くは中世後半のものである。よって、焼土層の時期は中世後半であろう。

SK29（第18図）

1区第4面で検出した土坑である。直径2.4m以上で調査区外に延びる大型の遺構であるが、井戸ではない。

59は白磁碗である。端反り口縁のV-4類またはⅣ類。60は同安窯系青磁碗で、柳描き文を施す。釉は灰黄緑色を呈する。61は龍泉窯系青磁碗である。外面に鎧蓮弁文を片彫りし、釉は青緑色を呈する。62は龍泉窯系青磁の鶴縁皿である。釉は淡緑色を呈する。



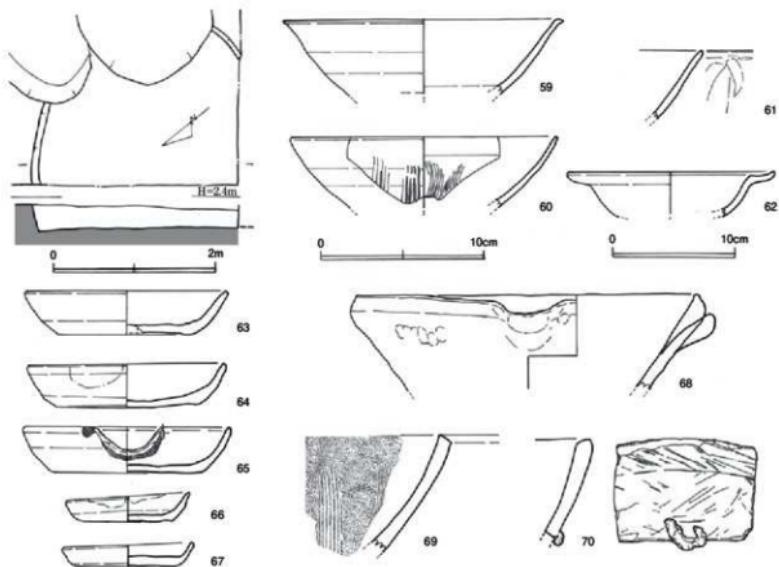
写真25 SK07壁面の焼土層（南東から）



写真26 焼土層SX28検出状況（東から）



写真27 焼土層SX28（南西から）



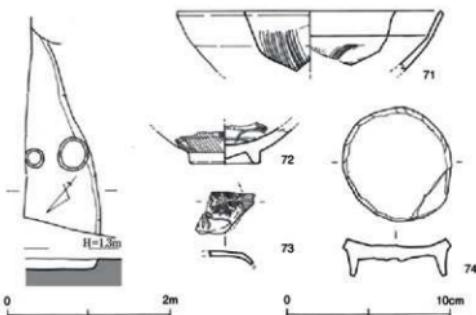
第18図 SK29 (1/60) および出土遺物 (1/3・1/4)
68~70は1/4、他は1/3

63~65は土師器壊、66・67は土師器小皿である。底部は回転系切りで板状圧痕がつく。65は口縁部を焼成後に故意に打ち割っており、そこに煤が付着する。64・66も口縁部の一部に煤が付着する。68は土師質の片口鉢である。復元口径28.0cmを測り、淡灰黄色を呈する。69は備前焼の插鉢である。暗褐色を呈する。70は滑石製石鍋である。外面に鉄製品由来の鉄銷が固着している。

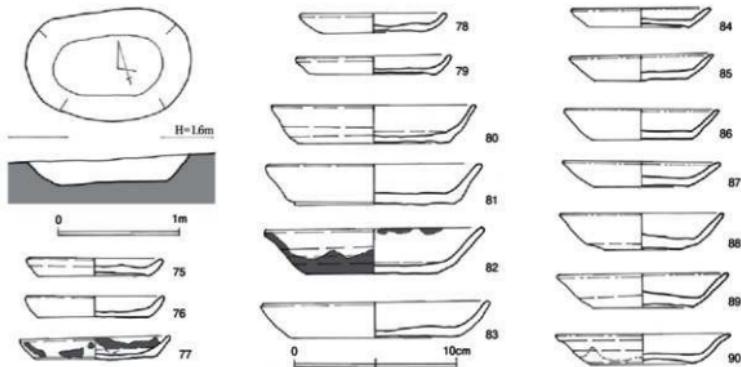
SK33 (第19図)

1区第5面で検出した土坑である。わずかな範囲だけ検出し、深さは10cmのみ残る。

71・72は同安窯系青磁碗である。内面に櫛書き文とジグザク状の点描文、外面に縦の櫛目文を施す。73は青白磁の合子蓋である。外面に陽印刻文を施し、側面を菊弁状につくる。74は白磁碗V類の底部を打ち欠いてつくった瓦玉である。



第19図 SK33 (1/60) および出土遺物 (1/3)



第20図 SK59 (1/40) および出土遺物 (1/3)

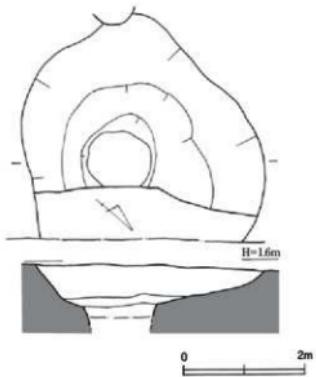
SK59 (第20図)

4区で検出した土坑で、長軸1.4m、短軸0.9m、深さ20cmの楕円形を呈する。土師器の壺・小皿と口禿げの白磁皿が多量に出土した。13世紀中頃～14世紀初頭。

75～79は土師器の小皿である。口径8.4～9.6cm、器高1.1～1.3cmを測る。80～83は土師器の壺である。口径12.6～14.1cm、器高2.2～2.8cmを測る。77と82は煤が厚く付着する。84～90は口禿げの白磁皿である。口径8.6～10.8cm、器高1.2～2.2cmを測る。

SE39 (第21図・写真28)

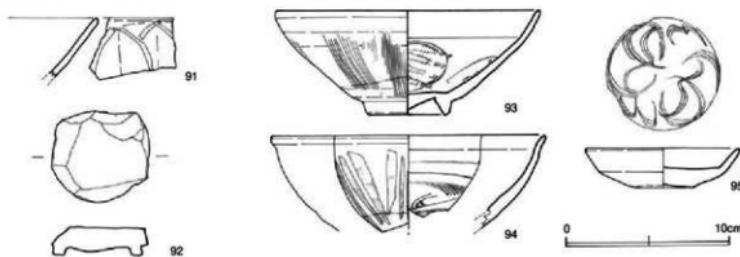
2区第1面で検出した井戸である。堀方の直径は4.0m程度。中央付近に直径1.2m程度の井筒部分がある。標高0.7m付近で湧水した。細片ではあるが土師器、瓦器碗、滑石製石鍋、白磁、同安窯系青磁が出土した。



第21図 SE39 (1/80)



写真28 SE39 (南西から)



第22図 SD35・62出土遺物 (1/3)

SD35 (第6図)

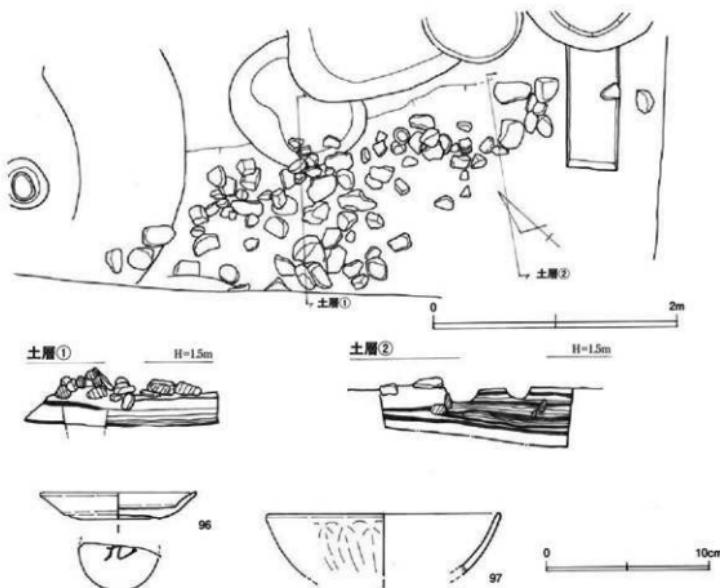
1区から2区にかけて検出した。幅70cm、深さ10~20cmを測る。

第22図91は龍泉窯系青磁碗である。92は龍泉窯系青磁碗の底部を利用した瓦玉である。

SD62 (第6図)

3区から4区にかけて検出した。幅40cm、深さ20cm程度を測る。SD35と似た方位をとる。

第22図93・94は同安窯系青磁碗。95は龍泉窯系青磁皿。



第23図 SX45 (1/40) および出土遺物 (1/3)



写真30 SX45（北東から）



写真32 SX45除去後（北東から）



写真29 SX45（南東から）



写真31 SX45上層②（北西から）

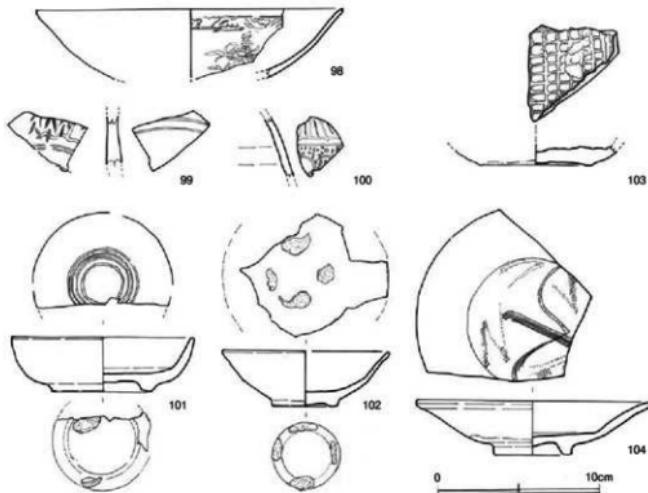
SX45 (第23図・写真29~32)

調査区の南端(2区)で検出した石列である。自然石が列状に並んでおり、ここを境にして左右の土層が大きく違う。東側は当時陸地化していた砂丘砂であり、西側は砂・シルト・粘土の細かい互層からなる水成堆積である。ちょうど当時の波打ち際付近に石列がつくれられて、砂の流出を防ぎ一帯の陸地化のために使われたのではないだろうか。石列の間から少量の土器が出土した。石列の真下に厚さ数ミリの黒褐色紗層が堆積しており、それを除くと黄灰白色の砂丘砂が現れる。石列の下面から10cm程度の深さで湧水する。

96は同安窯系の青磁皿である。口径9.6cm、器高1.7cm、底径4.8cmを測る。外底に墨書あり。「九」か。97は龍泉窯系の青磁碗である。外面に細い錦蓮弁文を片彫りする。

その他の出土遺物 (第24図)

98は高麗青磁の碗である。胎土は灰色で緻密。内面に白色土で花文等を象嵌する。SK52 (4区1面)出土。99も高麗青磁である。胎土は灰色で、内面に白色土と黒色土の象嵌、外面に白色土の象嵌を施す。SE37 (2区1面)出土。100は高麗から李朝の象嵌青磁の瓶である。胎土は灰白色で、外面に白色土と黒色土で文様を象嵌する。99と同じくSE37 (2区1面)出土。101は象嵌青磁の壺である。李朝か。胎土は暗灰色で、内面見込みに3条の円を白色土で象嵌する。縁付に3か所目跡が残る。SP118 (1区3面)出土。102は青磁の小碗である。内面見込みに4つの目跡が残る。1区3~4面包含層出土。103は瀬戸焼の鉢皿である。緑灰色の釉が底面を除き外面にかかる。底部は糸切り。SK38 (2区1面)出土。104は白磁皿である。見込みにヘラ描きの文様と櫛の先端でつけたジグザグ状の点描文を施す。1区5面の南端、砂丘砂直上から出土した。



第24図 その他の出土遺物 (1/3)

第4章　まとめ

今回報告する博多遺跡群第231次調査地点は、現在の須崎町、中世段階では息浜（おきのはま）の西側縁辺部に位置する。

まず敷地の4分の1の範囲（1区）について、江戸時代から中世前期までの5面に分けて調査をした。その結果、現地表下1.5~2.6m（第3面）まで江戸時代の地層が堆積していた。江戸時代の遺構としては、井戸や石組の土坑などを発見した。瓦や染付の肥前陶磁器などが出土した。興味深い遺構としては、丸瓦を土坑の四周にきれいに並べた土坑SK17がある。土坑内から大量の丸瓦・平瓦が出土するので瓦の廃棄土坑と考えられるが、単に廃棄するだけの目的ならばなぜ周囲に丸瓦のきれいに並べたのか謎である。平面が正方形に近い石組の土坑が博多遺跡群ではよく見られるが、SK18は石と瓦を組み合わせて周囲の壁をつくった、石・瓦組土坑である。

第3面で検出した焼土層は中世後半のものと推測する。その下、現地表下3.4m（標高1.2m）付近の第5面で砂丘の遺構面を検出し、12世紀後半頃の中国から輸入した陶磁器（同安窯系青磁や龍泉窯系青磁）、土師器の皿などが出土した。

残りの範囲については、調査期間の制約上、中世前半の生活面に絞って調査を実施した。当時の地形は南西側の現・那珂川にむかって緩やかにくだっていき、地形の傾斜に沿って石を並べたり（SX45）、小さな溝（SD35・47・62）を切ったり、湿った砂の上に人工的に粘土の盛土をして固くしまった地面を整地したりした痕跡が見つかった。検出した遺構は土坑数基と溝、小さなピットである。

以上のことから、本調査地点は中世前半の12世紀後半頃、ちょうど海岸線近くの微傾斜地にあたり、人々が盛土などで整地をして住みやすい環境を整えていったことがわかる。その後、中世後半から江戸時代にかけて何度も盛土を繰り返し、その厚さは2mに及ぶ。江戸時代に入ってから本格的に人々の生活の場となり、現在につながる商業都市として栄えたことが推測される。

報告書抄録

ふりがな	はかた						
書名	博多184						
副書名	第231次調査報告						
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第1451集						
編著者名	上角智希						
編集機関	福岡市教育委員会						
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1						
発行年月日	2022年3月24日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	発掘期間	発掘面積 m ²	発掘原因
はかた　い　せき　ぐん 博多遺跡群 第238次調査	ふくおかし　はかた　く 福岡市博多区 須崎町 16-1, 16-2, 16-3, 17, 31-1, 31-2, 32	40132	0121	33度 35分 46秒	130度 24分 16秒 ～ 20211101	315	記録保存 調査
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
集落跡	中世・近世	井戸、土坑、溝		土師器、青磁・白磁、瓦			
要約	本調査地点は息浜西側の縁辺部にある。計5面について調査し、中世前半から近世にかけての土坑、井戸、溝等を検出した。						

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1451集

博多184

- 第231次調査報告 -

2022（令和4）年3月24日

発行 福岡市教育委員会

〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1

印刷 株式会社 博多印刷

〒812-0028 福岡市博多区須崎町8-5

